黴

――映画文学人生論

原作：徳田秋声（1911）「朝日新聞」
参考：『新世帯』(1908）「国民新聞」
『あらくれ』（1915）「読売新聞」
『仮装人物』（1935-38）「経済往来」
『縮図』（1941）「都新聞」

秋声の小説今日から出申候。
文章しまって、新しい肴の如く候

徳田秋声『黴』の東京朝日新聞への掲載がはじまったのは明治四十四年八月一日。初日掲載文を読んだ夏目漱石は小宮豊隆に手紙でその感想を伝えた。「秋声の小説今日から出申候。文章しまって、新しい肴の如く候」。では、「新しい肴の如く」という文章とはどのようなものか。

笹村が妻の入籍を済したのは、二人のなかに産れた幼児の出産届と、漸く同時くらゐであった。

家を持つといふことが唯習慣的にしか考へられなかった笹村も、其頃半年弱（たらず）の西の方の旅から帰って来ると、是迄長いあひだ厭や／＼執着してゐた下宿生活の荒（さび）れたさまが、一層明かに振顧（ふりか）へられた。彼方此方（あっちこっち）行李を持廻って旅してゐる間、笹村の充血したやうな目に強く映ったのは若い妻などを連れて船へ入込んで来る男であった。九州の温泉宿では亦無聊に苦しんだ揚句、湯に浸りすぎて熱病を患ったが、時々枕頭（まくらもと）へ遊びに来る大阪下がりの芸者と口を利くほか、一人も話相手がなかった。

私は一読しただけでは話のつながりがよく理解できなかった。妻の入籍と幼児の出産届、西の方の旅、長い下宿生活の荒れたさま、若い妻などを

黴――映画文学人生論

連れて船へ入込んで来る男、熱病を患った九州の温泉宿、時々遊びに来る大阪下がりの芸者――とりとめのない時間の流れの中にこれだけの情報がつまっていて、つながりがよくわからない。

笹村は作家で、尾崎紅葉のような先生に師事している。泉鏡花、小栗風葉、三島霜川などをモデルにした人物も登場する。みんな明治二十年代から三十年代にかけて文壇で知られた硯友社の作家たちで、徳田秋声もその一人だった。

『黴』には紅葉の死も描かれているが、その死と日露戦争を境にして、硯友社の時代は終わり、自然主義が文壇の主流になった。ところが、秋声の作風はもともと自然主義的だったのか、『黴』をきっかけとして急に注目されはじめた。

「文章しまって、新しい肴の如く」と漱石がいう秋声の文体は紅葉の『金色夜叉』や鏡花の『婦系図』のような美文ではない。漱石の『草枕』や『虞美人草』の文体とも違う。美文に食傷した当時の読者は事実をありのまま書く『黴』の文体が新鮮だったのかもしれない。

筋は影の薄い男が手伝いに来た女といつのまにか一緒になる。単なる野合で、ロマンもエロスもない。別れようと思っていると、子供ができる。里子に出そうとしたが、それもできないという退屈な話。読書の玄人でないと味がわかりにくい。

水をのむ猫の小舌や秋あつし　　秋声